

はじめてのオープンダイアログ 対話をもたらす回復の力

浅井伸彦, 白木孝二, 八巻 秀編著

北大路書房, A5判 208頁, 3,080円, 2025年9月刊

(福岡大学 人文学部教育・臨床心理学科) 本山智敬

本書はタイトルの通りオープンダイアログ(以下、OD)に関する入門書であるが、かなり本質的である。著者らはフィンランドに何度も渡り、ODの国際トレーナーの資格を取ったり、フィンランドで実際に行われている実践や考え方を学び、ODの創始者であるセイクラ氏やアーンキル氏との交流もある。日本にODが紹介されてから10年以上経ち、ODが日本人にどのように理解されてきたのか、その経過を踏まえて、著者らはここで改めて入門書を出す必要性を感じたのであろう。その思いや著者らのメッセージが、本書の随所から伝わってくる。

第1章と第2章で、ODの基本ルールやマナーの説明、よくみられる誤解の解消から始まり、続く第3章と第4章では、有名なODの主要7原則、対話実践において鍵となる12要素が紹介される。それらを通してODの全体像を掴んだ後に、その後の章ではODをさらに理解し、実践する上で重要なキーワードとなる「ダイアロジカル・スペース(対話的空間)」「ポリフォニー」「リフレクティング」「『今、ここにいる』こと」「言葉と内的・外的ダイアログ」がそれぞれ丁寧に解説される。ここまで読み進めてODのことがより理解されてくると、そもそもODが生まれた背景は何だろうという関心が生まれるが、そこに第10章の「ODの歴史」が役に立つ。そこではOD理解に必須の家族療法についても解説されるが、ここはOD以前から家族療法に取り組んできた著者らだけに、非常に分かりやすい。続いて、第11章で「未来語りのダイアログ(Anticipation/Future Dialogues)」, 第12章で「早期ダイアログ(Early Dialogues)」が紹介される。両者はODと並ぶ北欧における三つの対話的アプローチとして有名であるが、日本では訳本以外の紹介が比較的少ないのが現状である。本書で白木氏によってそれぞれの基本的特徴が図式化と共に丁寧に解説されているの

は大変貴重である。その後、第13章でODの組み方のまとめがチェック項目方式で整理され、実践上のヒントが補足される。

通常の入門書はここで終わるが、本書は第14章と第15章で改めてODについて検討する。第13章まででは、著者らのメッセージが十分に伝わらないためであろう。著者らが強調するのは、ODはそのやり方やリフレクティングといった手法だけでなく、それぞれの場できかに「民主的・対話的なあり方」を実現していくか、また「民主的」あるいは「対話的」とはどういうことなのか、実践においてそれらを誠実に検討する姿勢を外すことはできないということである。八巻氏と浅井氏の対談形式で語られる第15章では、一人ひとりを大事にすること、それぞれの語りや意見を大事にすることがなぜ回復につながるのかについて、浅井氏は「自然に戻る」と述べている。人間として本来あるべきものである「ダイアログ(対話)」という営みを取り戻していくプロセス、それがODの対話的实践(アプローチ)にはあるというのだ。

ODが行なっていることは一見当たり前のようにみえるが、人に対する敬意とあたたかいまなざし、そして対話を持つ可能性への信頼が根底にある。ODの基本から全体像まで幅広く学びたい人はもちろん、対話を重視した実践に取り組んでいきたい読者は、本書が伝えるODの深いエッセンスから多くのヒントを得るだろう。支援者として私たちが本来大事にしたい視点にもう一度立ち返らせてくれる一冊である。